

高等学校の現場での近年の「人類」の扱いについての変遷と今後の展望

市石 博（東京都立国分寺高等学校／日本人類学会）

社会的には人種学は大人気である。書籍では「サピエンス全史」は売れ行き好調で、マスコミや書評でもさかんに取りあげられている。人種学に関する新書もさかんに出版され、本屋に平積みにされている。テレビ番組でもNHKスペシャル「人類誕生」などが作られ、話題になっている。

しかし、高等学校の現場ではやや趣が異なる。生物学の分野では、10年ほど前には、ヒトの生物学中心の生物IAという科目が存在した。この科目的センター試験も行われた。しかし、もう一つの生物IBでないと受験科目にならない大学が多いことも影響して、履修させない傾向が強かった。残念ながら10年で消えてしまった。不人気な理由は受験だけでなく、教える側が「ヒトに対しての知識」をもっていない場合が多く、授業で取りあげても内容が深まらないということが積極的な採用を生まなかつたことが予想される。

その後の学習指導要領では、生物においては「人類」は消えてしまった。危機感を感じた日本人類学会では、現在実施中の学習指導要領を策定されるタイミングをねらって、教育普及委員会から文部科学省に対して「人類」について学校教育で扱うことの重要性についての要望書が出された。その結果、学習指導要領の解説において「ヒトの進化についても触れることが考えられる。」と記述された。その結果、すべての教科書に人種進化が登場した。ただし、各社の教科書におけるその扱いは様々である。

他の教科については、世界史では「人類は各地の自然環境に適応しながら農耕や牧畜を基礎とする諸文明を築き上げ・・・」と記されている。

今年度3年後に実施される新学習指導要領が発表された。生物においては、「靈長類に関する資料に基づいて、人種の系統と進化を形態的特徴などと関連づけて理解すること」とされ、前回の「触れる」に比べて内容の充実が求められるようになった。他の教科では、以下のようである。

- ・地学基礎・・「ヒトの進化に触れること。直立二足歩行などに触れる。」
- ・世界史・・必修科目は「日本史」と「世界史」の合体した科目である「歴史総合」という科目になり、扱う範囲は近現代史で初期人種の進化は扱われない。新科目「世界史探究」においては、「地球環境から見る人種の歴史」の単元において、「地球の誕生から現生人類の登場、その地球規模での拡散の様子などを取りあげ、地球の歴史の中で人種の歴史が

占める位置や生活や文化の多様性などについて考察し表現することにより、人種の歴史と地球環境の関わりを理解するようになる。」とされており、「サピエンス全史」などの注目が影響を与えたのかも知れない。

「人種」についての扱いは、関連する科目において少しずつ進展しているように感じられるかも知れないが、「新学習指導要領では全員が学ぶ科目では人種の進化は扱わない」ということに実はなっている。「生物」は選択科目で、履修者は理系の1/4程度である。「地学基礎」は選択者少数である。「世界史探究」は理系の生徒はまず履修しないし、文系生徒の「日本史探究」を選択するか、「世界史探究」を選択するかとなり、文系の過半数程度は選択するかといった状況である。現在の必修科目の「世界史」が「歴史総合」という科目になって、扱う範囲が近現代史になったのが大きい。

現在の前の学習指導要領では理科は、進学校においては、理系は物理、化学、生物、地学のうち2科目を履修すれば良いという時代があった。このときは、物理、化学を選択して理系に進む生徒は、高校卒業段階でDNAって言葉は聞くけど、それは具体的にはどんな物質でどのようにして遺伝子として働くのという状況で大学に進学することが起こっていた。

人種の進化においても、同じような状況が予想され、社会の中での人種に対する注目度との乖離が起こる。学校で学ぶことの大半は「ヒト」についての理解である。そのベースとなる、人種の進化が扱われないことは地球の歴史の中で環境とのやりとりの中で進化してきた「人種」の位置づけが明確にならないことを意味する。

このような状況にどう対処していくら良いかをシンポジウムに参加された方々と考えていきたい。

キーワード：人種学、サピエンス全史、学習指導要領、教育普及委員会、生物、地学、世界史